

飛鳥資料館の特別展示

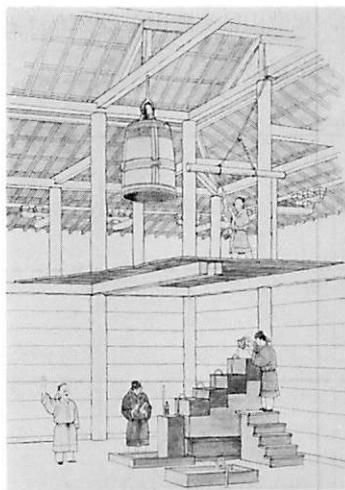
飛鳥資料館

特別展示『渡来人の寺』 檜隈寺と坂田寺は、飛鳥の代表的な渡来人である東漢氏と鞍作氏によって造営された。当研究所では、ここ数年来、これらの寺院の発掘調査を実施してきた。展示では、このたび村に返還された於美阿志神社十三重石塔婆埋納物（重要文化財）を中心に、これらの調査によって検出した瓦など発掘成果の一端を紹介し、あわせて、飛鳥における東漢氏、鞍作氏の動向の素描を試みた。とくに、1980年4月の発掘調査で検出した坂田寺仏堂須弥壇の鎮壇具については、仏堂の柱や須弥壇の模型の一部を館内につくり、鎮壇具の出土状況を再現した。

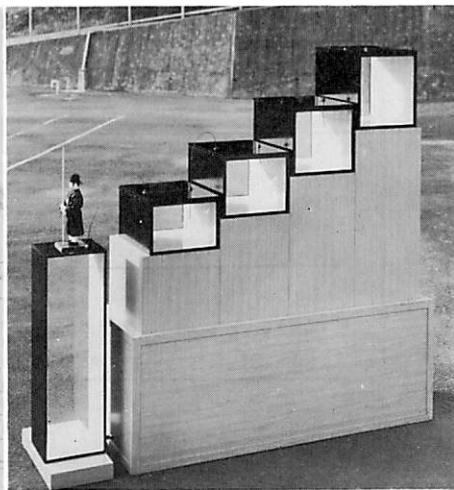
特別展示『飛鳥の水時計』 『日本書紀』によると、斉明六（660）年、中大兄皇子は漏刻台をつくっている。1981年12月、この漏刻台とみられる遺構が飛鳥水落遺跡で発見された。この成果をもとに、関連諸科学や各界の協力を得、二つの模型が完成した。一つは、光ファイバーを用いて水の流れを表わした遺構模型（1/20）、他の一つは、実際に水を入れて時を計ることのできる水時計復原模型（実大）である。展示では、これらの模型のほか、復原した漆塗木箱、木樋、銅管、ラップ状銅管、建物や木樋に使われた鉄釘、土器などの出土品も紹介した。また、はじめての試みとして、コンピュータ・グラフィックにより、水落遺跡の建物の復原、水時計の動き、水時計のシミュレーション、水時計の水槽の水位変化を映像化し、解説をつけて館内で放映し、さらに館内で30分ごとに、太鼓と鐘を鳴らして古代の時刻の呼称を放送した。なお、水時計復原模型では、有職人形司に依頼して、箭を持つ人形を新たに製作した。

このほか、水時計ができるだけ正確な時刻を示すようにするため、10月初旬から11月下旬と

いう展示期間における気温変化の影響も考慮して、目盛の間隔を変えた数種類の箭も作った。結局、展示終了間際には、30分単位の目盛で、展示当初にくらべると約2mm短い箭を用いる結果になった。（小林謙一）



水時計建物内部の想像図



水時計復原模型